

『水原紫苑の世界』

(深夜叢書社)

本書は、水原紫苑の自選による五百首と論考・エッセイ・短編小説・佛語譚二十首など多岐にわたる作品を収める。

歌舞伎や能の世界にも精通している水原である。歌人に加え各界の文化人たちによる重層的なアプローチによって、水原紫苑の世界を探究してゆく内容だ。論考とエッセイ、十首選と作品論、対談と鼎談などを収載。巻頭には関わりのある人々との貴重な写真を付す。

とりわけ、十ページにわたる詳細な年譜が興味深い。例えば十二歳のとき、母に馬場あき子の『鬼の研究』をプレゼントされるとある。水原の多彩な活動を知り作品研究をするのに価値のある資料である。

論考の中で、高野公彦は歌集『びあんか』について、「この現世を規定してゐる時間と空間の枠組を超え、作者は自由に大きな時間・空間を往き来してゐる」と一九八九年に評しているのが心に残った。

水原紫苑の代表作品のほか、作品の中核にある現実部分を知ることが可能な一冊である。

(柴田 佳美)

魚村晋太郎歌集

『バックヤード』

(書肆侃侃房)

榎植、花槐、未央柳、酢漿草、底紅、臥子、刺蛾、細蟹、壁蝨。この歌集を通していくつ生き物の名を調べただろう。読みながら手を止めまた読む。時間を忘れ、われを忘れる。

水門にみづはたゆたふ春の雨だつたことなどいまはわすれて

うつむいてメール打つゆび液晶を素早くうごきとまる時折

この径ではない、とおもへど沈丁花にほへば傘をさしかけてゆく

多くの人は「この径」と思う正しいみちへ行くのだろう。また、社会の概念に対し鋭い視線を持っている。

〈通常〉についての定義はむろんない指でなぞればすべる〈通常〉

まだなにかをわすれたいのかゆりの木はからだをひらく五月の雨に

思惟しながらみる世界は花がひらく速度ほどにゆつくりとある。「この径ではない」と思っても惹かれれば好んでそちらへ行く

感覚を導びたくなる第三歌集。

(中村 恵)

林和清歌集

『朱雀の聲』

(書肆侃侃房)

失つた空腹もとめて歩いてゐる出口ばかりのしづかな街を

あとがきによると、コロナ禍の中で詠んだ歌は第一部のみで、歌集後半は二〇一〇年頃の作品で構成されているという。たとえば、能「鶴」で悲惨な殺され方をする鶴に成り代わって詠んだかのような一連や、「つらつら椿」を明るく春の歌としてではなく死の歌として詠む一連、

縦に見る観覧車はほほ殺戮の道具のやうで赤く動けり

と意外な見立てで衝撃を与える歌、崇徳院の怨念伝説をつぶさに辿る一連など、どこか死に魅入られている感じさえする作品が多い。しかし、それは作者が熟考した構成上の態であり、コロナ禍による政情不安と人々の疑心暗鬼の投影でもあるのだろう。どんな状況の中でも決して揺るがない、歴史や文学への信頼が大切であることを、作者はよく知っている。

道長が詠めた夜から千年目の月が出て欠けて今日のごもり

(久保田智栄子)